

看護技術を患者に適用する際の学生の思考のプロセスに関する要因の文献的検討

雨宮 由紀¹⁾ 大島 弓子²⁾

要 旨

学生が既習の知識や経験、生活体験などを関連させて看護技術をどのように用いるかを考えていくこの思考のプロセスに焦点をあて、平成2年からの文献を分析した。その結果、①「学生が患者に合った技術を選択する際、その技術を選択していく思考のプロセスの中に、既習の知識・経験を使って技術を選択して実施した」と記述内容がある文献は42件中9件であった。②実際に患者に適した技術を選択し実施する際の思考のプロセスにおいて、学生が最も多く使っていることは、実際の患者とのやり取りの中で感じたり、学んだりして得た経験であった。また、講義や知識、生活体験も使って患者の状況を理解し、患者に合った技術の選択を行っている。その際、学生の情報分析能力が不十分であると、患者に適した技術の選択が難しくなっている。③学生が看護技術を選択する際に重要となる要因は、「情報分析」「患者理解」「実体験」「技術の習得」であった。

キーワード：看護学生、看護技術、思考過程

I. はじめに

看護は、患者/家族のかかえる健康上のニーズに適したケアとして提供されることが必要なことは周知のことである。したがって、患者/家族の状況をアセスメントし、ケアを提供することは重要である。そのため、看護基礎教育においては、この患者/家族の状況を実際に体験したり、設定したりする学習を臨地実習、校内実習、事例演習等でトレーニングとして行っている。当然のことながら、臨地実習に出る前の学生は、実際の患者と接した経験に乏しいため、患者を現実的にイメージすることが難しい状況にある。看護学の初学者であるこの時期の学生に、患者/家族の健康上のニーズに適したケアを提供する基礎的な学習として、ケアを構成する1つ1つの看護技術を講義、事例演習、校内実習を通し、限られた時間を有効

に活用して効果的に教授していくには、様々な教授-学習方法の工夫が必要である。

この看護技術の教授-学習に関する文献の中で、桑野¹⁾は、看護技術の意義や必要性に関する記述に比べると、いろいろな状況の患者に対する具体的な技術、例えば熟練看護婦の効果的なからだの動きがわかるなどの記述が少ないことを上げている。この課題克服の工夫には、患者/家族のイメージが現実的に出来ることも必要であろうと思われる。また、藤本²⁾は、生活援助技術の学習において重要なことは、自分の経験を常に振り返り、意味づけていく思考を身につけることが必要なのであると述べている。つまり、学生の経験を意味あるものとしていくことが大切であることを示唆しているとも考えられる。

これらから、看護技術を効果的に教授するには、

(所 属)

1) 2) 山梨県立看護大学

(専攻分野)

基礎看護学

患者/家族のイメージが現実的に出来ることや学生が看護技術を学習していく中で、その経験を意味のあるものとして捉えていく思考のプロセスが育つことが重要なのではないかと考えられる。この後者の思考のプロセスは、学生が患者の状況と既習の知識や経験、自らの生活体験などを有機的に関連させて、看護技術をどのように用いるかを考えていくことであると研究者らは考えた。また、この思考のプロセスを習得することは、看護技術がパターン化した手順で終わらず、本来の目的である患者/家族のケアとして生かしていける学びにつながるのではないかと考えた。

平成2年から実施された看護基礎教育のカリキュラムや平成9年から実施されているカリキュラムに流れる考え方、また、大学化が進む中で、学生が思考していくことを大切に考える考え方が、現在の看護基礎教育で重要視されてきている。しかしながら、看護技術の効果的な教授－学習方法を考える上で必要と思われる学生のこの思考のプロセスについて、どのように有効であり、また、どのような知識や体験が影響するのかなどについて、現在、十分な見解が得られているのか、日頃から疑問になっている点である。

そこで、今回、学生が既習の知識や経験、自らの生活体験などを有機的に関連させて看護技術をどのように用いるかを考えていくこの思考のプロセスに焦点をあて、平成2年から現在までの文献を分析し、より効果的な看護技術の教授－学習方法の構築への手がかりを考える。

<用語の操作的定義>

看護技術；看護技術とは、看護ケアを行う上で用いる技術であり、看護技術いくつかを複合して看護ケアとする場合もあるし、看護技術イコール看護ケアでもあり得る。

思考のプロセス；学生が、患者にその看護技術をどのように用い、どのような方法がよいか、どう実施できたかなどについて、既習の知識や経験を使ってあれこれ吟味して考えていく経過をいう。

Ⅱ. 研究目的

学生が看護技術を選択し実施する際、その適用の方法を考える思考プロセスの中で、今までに習得した知識や、経験してきたことが影響しているのかについて明らかにする。

Ⅲ. 方法

1. 研究デザイン：文献研究

2. 対象文献：平成2年～平成12年までの国内の看護系雑誌・看護系学会誌から、看護技術を対象に適用する際の看護学生の思考のプロセスについて分析されていると思われる42文献。

<対象文献の選択と方法>

1) 平成2年～平成12年分の文献

平成2年から判断力、応用力、問題解決力の育成を趣旨に看護基礎教育カリキュラムが改正された。このカリキュラムの変更により、看護技術を適用する際の看護学生の思考プロセスにおいても、判断力、応用力、問題解決力に着眼する傾向が高いのではないかと考えられる。そのため学生の思考のプロセスに関する研究も多いと予測でき、平成2年から平成12年までの文献を対象範囲とした。

2) 国内の看護系雑誌・看護学会誌の文献

看護教育制度や社会的・文化的な背景の相違は、思考のプロセスの影響要因になると考えられるため、今回は国内のみの文献を対象とした。

3) 上記1)、2)の条件下でJOIS (Japan Science and Technology Corporation, Information Center for Science and Technology On-line Information System) を用い、以下のキーワードを組み合わせて検索し、得られた文献を対象とした。

①看護技術、看護学生

②思考、看護過程、考え、クリティカルシンキング

③実習、演習、講義

3. データ化の手順、分析方法

1) 選択した文献を研究者らで1文献ずつ精読し、以下の視点で内容分析を行った。

(1) 1文献の中に記載されている意味内容のまとまりを1つのデータとした。

(2) (1) で得られたデータを、類似している意味内容ごとにカテゴリー化した。

(3) カテゴリー化した文献を、さらに詳細に分析・検討した。

(4) (2) でカテゴリー化したものを多面的にとらえるため、視点を変えて新たなカテゴリー化を試み、内容分析を繰り返した。

2) 1) で得られたデータを集計し、カテゴリーごとに量的・質的な比較、分析を行った。

3) 内容分析の信頼性、妥当性をはかるために複数の研究者で、時間をおき、繰り返して分析を行い、一致をみないものについては討議、検討して分析を行った。

4. 研究期間：平成12年6月～平成12年10月

Ⅳ. 結果

1. 全42文献の内容分析について (表1)

全42文献を内容分析した結果、表1に示すように、1)～3)の3つのカテゴリーに大別して分類された。このカテゴリーを「分類1」とした。この「分類1」は、1)「学生が患者に合った看護技術を選択する際、その看護技術を選択していく思考のプロセスの中に、既習の知識・経験を使って看護技術を選択して実施した」の記述内容があるもの；9文献、2) 既習の知識・経験を使って看護技術を選択して実施してはいないが、「患者に合った看護技術を考える際の学生について」の記述内容があるもの；18文献、3) 本研究目的と全く関連のない記述内容のもの、「その他」；15文献であった。この中で3)「その他」の文献は、研究目的と合わないため、以降の分析対象から除外した。

1) の9文献は、本研究の目的にそった記述内容が記述されている文献である。しかしながら、9文献と数量的には多くみられなかった。

2. 「分類1」の「既習の知識・経験を使って看護技術を選択して実施した」の文献の詳細な内容分析について (表1)

「分類1」- 1) の9文献を類似した意味内容ごとにまとめ分析した結果、2つのカテゴリーに分類された。このカテゴリーを「分類2」とした。「分類2」は、1)「既習の知識・生活体験を使って看護技術を実施した」の記述内容があるもの；5文献、2)「実習での経験を使って看護技術を実施した」の記述内容があるもの4文献であった。

「分類2」- 1) は、さらに内容的に2つのカテゴリーに分類された。このカテゴリーを「分類2」とした。この2つは、既習の知識・生活体験を使うことで、(1)「患者を理解して看護技術を選択して実施できた」の記述内容があるもの；3文献と、既習の知識・生活体験の未熟なことに関連して、(2)「情報の分析が不十分なため、看護技術の選択が難しい」の記述内容があるもの；2文献であった。

3. 「分類1」の「看護技術を考える際の学生について」の文献の詳細な内容分析について (表1)

「分類1」- 2) の18文献を類似した意味内容ごとにまとめ分析した結果、5つのカテゴリーに分類された。このカテゴリーは上記2. と同様、「分類2」の範疇とした。この5つのカテゴリーは、(1)「情報の活用が不十分である」；8文献、(2)「実習での経験が生かされている」；4文献、(3)「看護技術が未熟である」；2文献、(4)「患者理解が大切である」；2件、(5) その他で、「実践による指導が生かされている」；1文献、「自尊感情の低い学生は、学力も低く実施までに時間がかかる」；1文献であった。

4. カテゴリーの視点を変えて分析し、新たにカテゴリー化した「重要視する要因」について (表2)

上記2.、3. の「分類2」について、内容的に他の角度から多面的に捉えるために新たな視点で分析を加えた結果、5つのカテゴリーが抽出された。a)「情報分析が大切である」；10文献、b)「実体験が大切である」；8文献、c)「患者理解が大切である」；5文献、d)「看護技術が身につけていることが大切である」；2文献であった。これらは看護技術を学生が選択する際に重要視されている要因と捉えられた。

表1：学生が患者に合った技術を選択する際の思考のプロセスに関する文献 N=42 (文献)

分類1	分類2	分類2	主 な 記 述 内 容
既習の知識・経験を 使って看護技術を選 択して実施した	既習の知識・生活体験 を使った	患者を理解して看護 技術を選択した 3	・言語的コミュニケーションが出来ない患者に対して、患者の気持ちを自分に置き換えて考 え、筆談やゼスチャーを使った。(患者の体験を共感することで、ケアが考えられる。)
			・経験と知識による患者のイメージと、実際の患者の状態に対する注目が、思考過程の起点 となって、疑問を抱き、仮説をたて、ケアを考えている。
			・講義や生活体験からの学習内容が豊富にあると、現象から多くの手がかりが得られ、具体 的看護方針の決定ができる。 さらに、感情がこの思考を促進させたり、滞らせせたりする ことに影響を与えている。(知識と感情がともに思考に影響)
		扱が 難しい 2	・事前学習内容を70%の学生が活用しようとしていたが、関連情報の分析・整理が十分に 出来ない。そのため、方法：技術の選択が難しいのである。
			・専門知識不足、生活体験の未熟さから、情報収集が出来ても分析に戸惑う傾向があり、対 象の示す反応の意味が理解できず、対応が難しい。
	実習での 経験を 使った	・老人保険施設で姿勢に関する援助が行いやすかった理由に、病院実習で学習した体験が生かされている からだと考えられる。	
		・実習で自分自身の行った一連の行動が知識となり自信となって、それを生かして行動に移す思考過程が得 られている。	
		・既習の方法を想起して援助につなげるよりも、実践の場で体験的に患者の状況を理解して援助を考えている。	
		・講義や演習によるイメージを使い現実の場面に対応するが、看護技術の未熟さを自覚しながら、行った援 助による肯定的な患者の反応や変化によって、さらに有効な援助を考えている。	
	看護技術 を考 える 際 の 学 生 に つ い て	情報 の 活 用 が 不 充 分 で あ る	8
・看護技術を選択する上での正しい知識が質問により確認がされているが、既習知識を生活している人間の 機能と関連付け捉えることが出来ていない。			
・対象となる人間を科学的にアセスメントし、全体を把握して介入できる力が弱い。			
・対象を理解することよりも、看護計画の中の看護ケアと科学的根拠を考えるが出来ないと自己評価をして いる。			
・環境整備について、教科書の内容をそのまま記憶した状態に近い一般知識範囲にとどまっている ため、看護場面や対象に適した行動を考えるまでにいたっていない。			
・情報が十分活用されないまま教科書的な計画を立案し、実施の意欲も薄いまま実習を終えている学生が多い。			
・体験学習(胃管挿入)後の学生の記録に、過去の学習内容と関連させて考えている記述が少ないことから、 理由や根拠などの要因と学習した知識が結びついていない。			
・看護援助の実習目標の到達度が24%と低いのは、学生の保有する知識・看護技術を駆使して実践する行動 力に問題があり、初めての体験に対する緊張から自己の能力が発揮できない状況にあるからでもある。			
実習 での 経験 が 生 か さ れ て い る		4	・実習で患者からの刺激によって感じる体験をした学生は、断片的な知識を単なる理解から応用へと活用が 出来、援助を発展させて考えることが出来る。
			・一緒に援助を行ったり、具体的な方法を助言してもらった体験によって、個別的な援助を実施した達成感 が得られる。個別性のある援助を行うことは実習でしか学習できない内容である。
			・実践から学んだ体験が生かされて看護過程が具体的に書けるようになった。
			・患者(老人)に対し具体的な声掛けの工夫をしたという行動によって、援助が考えられるようになった。
未 熟 2		技術 が	・看護技術に関する準備から、実施、所要時間にいたるまでの評価が低下しててる。
			・実習で学生は看護技術が未熟であるために、自分が援助することに神経が集中し患者の反応や状況に目 がむけられず、患者に合った援助が出来ない。
理解 2		2	・患者に対する情緒的な理解が深まりとともに援助活動ができる。
			・看護の不適切さは未経験から来るものではなく、患者の気持ちを受け止めていないことに原因がある。
その他		その他	・看護技術の実施にあっては指導者が個々にあった援助を実践して見せてくれたことが生かされている。
			・自尊心の低い学生は、学力にゆとりがなく行動を起こすまで考えている時間が長い。
その他	15		

表 2：看護学生が看護技術を選択する際に重要視する要因 N=42（文献）

重要視する要因	主 な 記 述 内 容
情報分析が大切である 10	・ 事前学習内容を70%の学生が活用しようとしていたが、関連情報の分析・整理が十分に出来ない。そのため、方法：技術の選択が難しいのである。
	・ 専門知識不足、生活体験の未熟さから、情報収集が出来ても分析に戸惑う傾向があり、対象の示す反応の意味が理解できず、対応が難しい。
	・ 患者への接し方、看護のあり方、患者との関係の築き方に置いて、経験に乏しい学生は判断や対処のレパートリーにも乏しく、冷静に患者の状況を見つめにくくなっている。
	・ 看護技術を選択する上での正しい知識が質問により確認がされているが、既習知識を生活している人間の機能と関連付け捉えることが出来ていない。
	・ 対象となる人間を科学的にアセスメントし、全体を把握して介入できる力が弱い。
	・ 対象を理解することよりも、看護計画の中の看護ケアと科学的根拠を考えるが出来ないと自己評価をしている。
	・ 環境整備について、教科書の内容をそのまま記憶した状態に近い一般的な知識範囲にとどまっているため、看護場面や対象に適した行動を考えるまでにいたっていない
	・ 情報が十分活用されないまま教科書的な計画を立案し、実施の意欲も薄いまま実習を終えている学生が多い。
	・ 体験学習（胃管挿入）後の学生の記録に、過去の学習内容と関連させて考えている記述が少ないことから、理由や根拠などの要因と学習した知識が結びついていない。
	・ 看護援助の実習目標の到達度が24%と低いのは、学生の保有する知識・看護技術を駆使して実践する行動力に問題があり、初めての体験に対する緊張から自己の能力が発揮できない状況にあるからでもある。
実体験が大切である 8	・ 老人保険施設で姿勢に関する援助が行いやすかった理由には、病院実習で学習した体験が生かされているからだと考えられる。
	・ 実習で自分自身の行った一連の行動が知識となり自信となって、それを生かして行動に移す思考過程が得られている。
	・ 既習の方法を想起して援助につなげるよりも、実践の場で体験的に患者の状況を理解して援助を考えている。
	・ 講義や演習によるイメージを使い現実の場面に对应するが、看護技術の未熟さを自覚しながら、行った援助による肯定的な患者の反応や変化によって、さらに有効な援助を考えている。
	・ 実習で患者からの刺激によって感じる体験をした学生は、断片的な知識を単なる理解から応用へと活用が出来、援助を発展させて考えることが出来る。
	・ 一緒に援助を行ったり、具体的な方法を助言してもらった体験によって、個別的な援助を実施した達成感が得られる。個別性のある援助を行うことは実習でしか学習できない内容である。
	・ 実践から学んだ体験が生かされて看護過程が具体的に書けるようになった。
患者理解が大切である 5	・ 患者（老人）に対し具体的な声掛けの工夫をしたという行動によって、援助が考えれるようになった。
	・ 言語的コミュニケーションが出来ない患者に対して、患者の気持ちを自分に置き換えて考え、筆談やゼスチャーを使った。（患者の体験を共感することで、ケアが考えられる。）
	・ 経験と知識による患者のイメージと、実際の患者の状態に対する注目が、思考過程の起点となって、疑問を抱き、仮説をたて、ケアを考えている。
	・ 講義や生活体験からの学習内容が豊富にあると、現象から多くの手がかりが得られ、具体的な看護方針の決定ができる。さらに、感情がこの思考を促進させたり、滞らせたりすることに影響を与えている。（知識と感情がともに思考に影響）
	・ 患者に対する情緒的な理解が深まるとともに援助活動ができる。
大切である 2	・ 看護の不適切さは未経験から来るものではなく、患者の気持ちを受け止めていないことに原因がある。
	・ 看護技術に関する準備から、実施、所要時間にいたるまでの評価が低下してる。
	・ 実習で学生は看護技術が未熟であるために、自分が援助することに神経が集中し患者の反応や状況に目がむけられず、患者に合った援助が出来ない。
その他	17

考察

1. 全42文献の内容分析について

本研究の目的にそった「学生が患者にあった看護技術を選択する際、その看護技術を選択していく思考のプロセスの中に、既習の知識・経験を使って看護技術の選択をして実施した」と記述内容がある文献は42件中9件と多くはなかった。また既習の知識・経験を使って看護技術を選択して実施していないが、「患者に合った看護技術を考える際の学生について」の記述内容があるもの；18文献の内容をみると、「情報の活用が不十分である」や「看護技術が未熟である」など、学生が行う看護技術の出来ていない箇所に関する分析が多い。このことは、学生の思考のプロセスの中でどのようなことが活用されて看護技術が行われているのか、をみていくことよりも、看護技術の習得を目指すという目標のもと、身近な問題の解決に着眼し、検討されている文献が多いことを示しているのではないかと考えられる。

2. 「分類1」の「既習の知識・経験を使って看護技術を選択した」の文献の詳細な内容分析について「分類2」から、実際に患者にあった看護技術を選択し実施する際の思考のプロセスの中で、学生が最も多く使っているものは、実際の患者とのやりとりの中で感じたり、学んだりして得た経験であるということがわかる。このように実習において患者との直接的なかわりを通し、個別性を重視したリアリティ (reality) のある看護技術を学習することは、個々の患者の感覚や心理への配慮、必要な援助とそのタイミングなどを考えることを繰り返し訓練することではないかと考えられる。そのため、学生には実用的な経験として印象強く残り、新たな課題に取り組む際に引き出されやすいのではないかと考えられる。

また「分類2」から、講義や知識、生活体験も使って患者の状況を理解し、患者に合った技術の選択を行ってはいるが、その際、学生の情報分析能力が不十分であると、患者に適した看護技術の選択が難しくなっているということが捉えられる。情報の分析能力が不十分であると、現象を理

解することや必要な援助の判断が困難となり、さらに学習した知識や経験の活用が困難となることが考えられる。情報の分析能力を養うことは、他領域でも重要とされる能力でもあるため、看護基礎教育の初期から意識的に導入していくことが重要であると考ええる。

3. カテゴリーの視点を変えて分析し、新たにカテゴリー化した「重要視する要因」について

学生が患者に適用した看護技術を選択する際に重要となる要因は、「情報分析」「患者理解」「実体験」「技術の習得」であると考えられる。以上の4つは、看護技術を教授する際、常に教授内容の構築に取り上げられているものであり、繰り返し教授されることによって、学生にその重要性が定着していくものと考えられる。重要な要因であると思われるものについて、看護技術の項目は相違しても、常に強調し、教育的アプローチを組み立てることが大切であると考ええる。また「情報分析」は、看護技術以外の講義でも常に強調され、多くあがっている要因であると考えられている点である。さらに、「実体験が大切である」に関しては、その体験が肯定的であることが重要な要因になっていると思われ、実体験の質も要因に関連するものと考えられる。

本研究の限界は、42文献の中での分析であり量的に十分ではない。また、今後の課題としては、文献探索の範囲を広げ十分に検討すること、さらに内容分析の方法を吟味し、より妥当性の高い方法で検討していくことである。

V. 結 論

文献を用いて内容分析した結果、以下の結論を得た。

1. 学生が患者に合った技術を選択する際、その技術を選択していく思考のプロセスの中に、既習の知識・経験を使って技術を選択して実施した文献は42件中9件であった。
2. 実際に患者に適した技術を選択し実施する際の思考のプロセスにおいて、学生が最も多く使っ

ていることは、実際の患者とのやり取りの中で感じたり、学んだりして得た経験である。また、講義や知識、生活体験も使って患者の状況を理解し、患者に合った技術の選択を行っている。その際、学生の情報分析能力が不十分であると、患者に適した技術の選択が難しくなっている。

3. 学生が看護技術を選択する際に重要となる要因は、「情報分析」「患者理解」「実体験」「技術の習得」である。

分析対象文献 (42文献)

- 1) 井口かほる, 大越一代: 新カリキュラム下の「基礎看護学」「成人看護学」の構築 ロイ適応看護モデルに基づいた基礎看護学の構築 北里看護専門学校の場合 1, 看護展望, Vol.23, No.12, 1347-1352, 1998.
- 2) 井上年恵, 他: 内科病棟実習における学生の患者理解の過程と教員の援助 老人患者を受け持った学生の経過分析から, 日看教会誌, Vol.5, No.2, 40-41, 1995.
- 3) 逸見英枝, 松本幸子, 横川絹恵, 白神佐知子, 上田幸子: 成人看護学における看護過程演習の効果と今後の課題 看護学生へのアンケート調査の分析結果より, 新見女子短大紀要, Vol.17, 117-136, 1999.
- 4) 射場典子, 他: 終末期実習における学生の自己評価と教員評価の比較 形成的評価を用いて, 日看研会誌, Vol.18, No.2, 60, 1995.
- 5) 岩佐好江, 須藤絹子: 学生の対象理解への傾向と特徴を踏まえた教育方法のアプローチ, 看護展望, Vol.24, No.8, 947-954, 1999.
- 6) 衛藤英子, 菊地恭子, 島田照子, 矢野章永, 鈴木良子, 杉本龍子, 本田英子: 実習場面における看護過程展開の困難に関する学生の認識, 日本看護学会集録 看護教育, Vol.26th, 25-28, 1995.
- 7) 大池美也子, 長家智子: 看護学生による経鼻的胃管挿入技術の体験学習に関する一考察 コルプの体験学習モデルを用いた分析を通して, 九州大学医技短大紀要, No.26, 59-66, 1999.
- 8) 奥原秀盛, 坂口千鶴, 守田美奈子, 常盤文枝, 大野和美, 松本智美, 黒田裕子: 臨地実習における看護学生の思考過程の明確化 (第1報) 思考過程を明確化する分析枠組みの開発, 日本赤十字看護大学紀要, No.12, 9-19, 1998.
- 9) 尾首睦美: 小児臨地実習における看護学生の不安要素に関する一考察, 九州大学医技短大紀要, No.26, 51-57, 1999.
- 10) 落合秀香, 中島明美, 小熊厚子, 小池克夫: 基礎看護実習時の学生が遭遇する困難について 看護過程の展開を通しての分析, 東京衛生局学会誌, No.101, 38-39, 1998.
- 11) 加藤光實: 看護実践力を育てる技術教育の試み 看護過程の学内演習の展開, 看護教育, Vol.39, No.5, 402-407, 1998.
- 12) 風岡たま代, 阿部裕子, 山口由子, 倉田トシ子, 森田チエコ, 松下由美子: 判断に基づく行動の育成をねらった看護技術教育の検討 思考に焦点をあてて, 日本看護学会集録 看護教育, Vol.26th, 52-54, 1995.
- 13) 川副しょう子, 池田久美子, 浜村美和, 辻淳子, 高見朋子, 加藤信子, 田中美恵子, 坂本せつ子: 新カリキュラム構築・展開事例集 専門分野のカリキュラム案と展開 成人看護学 学生が主体的に学べる学習展開を探る, 看護展望, Vol.22, No.219-227, 1997.
- 14) 菅野久美子, 米沢久子, 瀬戸奈穂美, 東口和代, 中村風: 看護学生の精神科臨地実習中の変化 自尊感情・不安・自我状態・満足感の関連, 日本看護学会論文集 看護教育, Vol.29th, 150-152, 1998.
- 15) 木村紀美, 花田久美子, 米内山千賀子, 大串靖子, 工藤せい子, 葛西敦子, 阿部テル子: 論理的思考力を目指した看護教育方法講義形式の授業における学生の論理的思考の状況, 日本看護教育学会誌, Vol.9, No.1, 1-11, 1999.
- 16) 桑子嘉美, 他: 回復期実習における学習効果 A D L 評価表を用いての検討, 日看研会誌, Vol.18, No.2, 61, 1995.
- 17) 河野恵美, 下村裕子, 村上里江, 西川佳子, 茶園美香, 東利江, 高橋優紀子, 竹村佐知子, 山下香枝子: 看護教育における臨床実習の効果的な指導方法の検討 自尊感情の低い傾向にある看護学生の事例に焦点をあてて, 慶応義塾看護短期大学紀要, Vol.9, 15-24, 1999.
- 18) 小林文子, 二村良子, 川井富貴子: 看護学生への教育・支援に関する検討, 保健の科学, Vol.39, No.1, 71-75, 1997.

- 19) 佐瀬真粧美, 鳴海喜代子: 看護学生の老人に接する態度・思考の変化について 老人保健施設実習後の調査から, 日本看護学教育学会誌, Vol.5, No.2, 38-39, 1995.
- 20) 佐藤みつ子, 浅川和美, 奥村百合恵, 坪井良子: 看護学生の実習目標到達度に関する考察 基礎看護学実習Ⅱの実施結果の調査から, 山梨医科大学紀要, Vol.14, 14-20, 1997.
- 21) 坂口千鶴, 守田美奈子, 奥原秀盛, 常盤文枝, 大野和美, 松本智美, 黒田裕子: 臨地実習における看護学生の思考過程の明確化(第2報) 学生の思考過程のパターンとその影響因子, 日本赤十字看護大学紀要, No.12, 20-33, 1998.
- 22) 塩月ぬい子, 浜田弘子, 中野静子, 上杉純美, 酒井淳子, 日野洋子, 梶本市子: 学生の臨床判断に影響する因子 学生の思いに焦点をあてて, 愛媛県立医技短大紀要, No.9, 21-30, 1996.
- 23) 下枝恵子, 本道和子, 亀岬陽子, 他: 看護学生の看護過程の学習に対する達成感とそれに影響を及ぼす要因 学内演習と臨床実習における分析, 都立医療技術短期大学紀要, No.11, 153-160, 1998.
- 24) 関口みつ江, 末木節子: 「環境」について教授・学習課程の検討 看護学生のイメージの変容, 日本看護学会集録 看護教育, Vol.27th, 179-181, 1996.
- 25) 丹下純子, 森内みね子: 老人保健施設での実習の学び 2年次の老年看護実習を通して, 神奈川県立平塚看護専門学校紀要, No.6, 34-41, 1999.
- 26) 土屋八千代: 看護学生のターミナルケアを通して自己洞察の分析, 看護教育, Vol.36, No.8, 714-719, 1995.
- 27) 土屋世都子, 菊池恭子, 鈴木良子, 並木弘美, 衛藤英子, 杉本龍子, 水吉征子: 看護学生3年生の自己教育力の構造とそれに影響する実習方法 同一学生の縦断的調査より, 看護教育, Vol.29th, 33-35, 1998.
- 28) 中田美智子, 奥野嘉津子, 橋本幸世, 山元孝子: 看護学生の効果的な看護過程の進め方, 兵庫県立尼崎病院年報, No.9, 117-118, 1997.
- 29) 西村正子, 貞岡美伸: 看護過程における看護診断能力の向上に向けて母性看護実習の到達度評価, 新見女子短大紀要, Vol.17, 13-20, 1996.
- 30) 松本かよ, 高橋俊子: 看護過程に関する学内学習後と実習終了後の理解度の比較, 聖隷学園浜松衛生短期大学, No.22, 47 - 51, 1999.
- 31) 森田恵美子, 吉川美枝子: 院内臨床指導者教育の試み 新任指導者の教育的能力と対人関係能力の評価, 陶生医報, No.15, 117-125, 1999.
- 32) 森尾里江, 小沢ミヨ子: 基礎看護実習における効果的な教育指導に関する研究 実習評価からみた学習到達状況の分析を通して, 東海大学短期大学紀要, No. 24, 149-161, 1990.
- 33) 東野智子, 前久栄, 山地教代, 張弘子, 石野レイ子, 古長益子: アセスメント能力を高める基礎看護学の構築 健康アセスメントと看護過程のつながりを明確にして 大阪労災看護専門学校の場合 1, 看護展望, Vol.24, No.6, 692-701, 1999.
- 34) 布佐真理子: 臨床実習において看護学生が看護上の判断困難を感じる場面における指導者の働きかけ, 日本看護科学会誌, Vol.19, No.2, 78 - 86, 1999.
- 35) 藤井憲子, 水溪雅子: 初期臨地実習における指導方法に関する検討, 岐阜医技短大紀要, No.14, 43-51, 1998.
- 36) 布施真理子: アセスメントに「患者の強み」を取り入れた看護過程展開の試み 実習後の学生の意識調査と実習記録の分析から, 日看教会誌, Vol.5, No.2, 82-83, 1995.
- 37) 船越和代, 谷まり子, 直江美弥子, 木内洋子: 看護学生の重度の障害児に対するイメージの変化 実習前と実習後の比較, 日本看護学会集録 看護教育, Vol.27th, 87-90, 1996.
- 38) 野村和子, 横山ハツミ, 斉藤早苗, 利木佐起子, 山口求, 河村圭子, 辰巳恵子: 成人・老人看護実習の看護過程の展開に対する学生の理解状況(第Ⅱ報) 講義・実習方法の改善による効果, 藍野学院紀要, No.11, 13-20, 1998.
- 39) 薬師寺文子, 川崎裕美, 桧原登志子, 森田愛子: 効果的な老人理解に関する看護教育方法の検討 学生のイメージをベースとした実習指導案, 広島県立保健福祉短期大学紀要, Vol.4, No.1, 35-45, 1999.
- 40) 山本洋子, 他: 実習の進行の程度による学生の診断過程の変化, 日看研会誌, Vol.20, No.4, 27-28, 1997.
- 41) 吉田哲, 荻野葉子: 学生のプロセスレコードを通して 学ぶ側と教える側の交流 整形外科実習 患者の「障害受容」の過程の受けとめ方, 看護実践の科学,

Vol.22, No.10, 47-51, 1997.

- 42) 吉田哲, 海野英子: 学生のプロセスレコードを通して
学ぶ側と教える側の交流 母性実習「産んだことのな
い人には分からない」をどう受けとめるか?, 看護実
践の科学, Vol.22, No.6, 53-57, 1997.

引用文献

- 1) 桑野タイ子: 私たちは看護技術教育をこう考える, 看
護教育, Vol.39, No.1, 69-71, 1999.
- 2) 藤本悦子: 生活援助技術教育において「ふりかえり思
考」を育成する意味, クオリティナーシング,
Vol.5, No.7, 508-513, 1999.

参考文献

- 1) 秋元とし子, 今瀬繁子, 稲光礼子: 学生の思考過程か
ら「学び」の可能性を探る—ふりかえり学習
(Reflective Learning)を通して—, 東海大学短期大学
紀要, No.32, 61-67, 1998.
- 2) 岩井恵子, 森本美佐, 林真由美: 「基礎看護技術」にお
ける効果的な学演習について—学生が主体的に取り組
める方法を試みて—, 奈良文化女子短期大学紀要,
Vol.7, No.2, 1996. Vol.22, No.6, 207-215, 1991.
- 3) 奥原秀盛, 守田美奈子, 坂口千鶴, 平田暁子, 伊藤美
也子, 常盤文枝, 黒田裕子: 臨地実習における学生の
思考過程とその影響要因—学生の記録における受持ち

患者とのその後作用場面の質的分析を通して—, 日本
看護学教育会誌, Vol.7, No.2, 90, 1996.

- 4) 桑野タイ子, 川崎佳代子: 看護基礎教育における技術
教育の課題: 文献検討, 看護教育, Vol.32, No.2,
100-105, 1991.
- 5) 仲島愛子, 北見かつ江, 新井真佐江, 長井美佐子, 松
井令子, 松浦照子, 中条篤子, 志田久美子, 塩谷とみ
子, 森谷悦子: 知識の統合を目指した新カリキュラム
の構築, 看護展望, Vol.24, No.2, 266-275, 1999.
- 6) 仲井美智子, 谷井康子, 服部宏子, 岡村貴子, 中西貴
美子: 基礎看護技術実習における新たな学習方法の試
み, 三重大学医療技術短期大学部紀要, Vol.4, 185-
191, 1995.
- 7) 正村啓子, 栗原保子, 島田ラク子, 田中シゲ子, 園田
志津子: 生活の援助への看護学生の考え方の特徴に関
する研究, 日本看護科学会誌, Vol.11, No.3, 192-193,
1991.
- 8) 山本明美, 出口貞子: 基礎看護学における対象理解の
道すじ 講義と実習との統合, 日本看護学教育学会誌,
Vol.7, No.2, 68, 1997.
- 9) 矢口みどり, 大下静香, 大森武子: 特集・学生の主体
性を読み取る 行動姿勢の視点から なぜ, 行動姿勢
を問題にするのか, 看護教育, Vol.39, No.6, 426-429,
1996.

A Study of analysis of literatures of factors affecting the thinking process of nursing students in attempting the application of nursing technique to patients .

AMEMIYA Yuki, OSHIMA Yumiko

Key Words : Nursing Students, Nursing Technique, Thinking Process